

要 旨

高校生の待遇表現にみる現代敬語教育の現状と課題

9N14004

中森 恭子

日本語教育では、敬語の指導にあたって、語彙としての敬語・狭義敬語のみを取り扱っていたのでは不十分だという考えが一般的である。それに対し国語教育では、数少ない機会で行われる敬語の指導は語彙中心であり、それ以外は日本語母語話者であれば自然に身に付くものとされてきた。しかし、社会に出る際に研修やマニュアル本で敬語を学びなおす者が多いという事実をみれば、国語教育での敬語の指導が何らかの問題を孕んでいると言わざるをえない。本論では、社会参加への準備段階でもある高校生に対する現代敬語教育の現状を明らかにし、課題を見いだす。

1. では、高等学校の国語教育における敬語指導の問題点を指摘し、2. では、学校教育を規定するものとして、敬語に関する国語施策を検討した。敬語に関する三つの施策のうち、「敬語の指針」（2007）の基本認識が、敬語とは相互尊重を基盤とすべきものであり、敬語の使用は適切な言葉遣いを主体的に選んだ自己表現であるべきとしていることを確認した。

戦前の言語政策は国定教科書を通して実現されるものであったが、現在の検定教科書ではどうか。3. では、「敬語の指針」を受けて、学習指導要領と国語教科書における敬語教育の扱いがどのように変化したのかを明らかにした。学習指導要領本文では「敬語の指針」の影響はほとんどみられなかったが、指導要領解説では「目的や場に応じて言葉遣いの適否を判断する能力」や「相手に応じた待遇表現の選択」など、円滑なコミュニケーションを維持するための現代敬語教育の必要性が明記されており、「敬語の指針」の影響がみられた。

次に、高等学校において国語科唯一の必修科目である「国語総合」の教科書を調査した。対象としたのは2005年度検定2007年度使用開始の「国語総合」の全教科書10社21冊と、現行の2011年度検定2013年度使用開始の9社23冊である。調査の

結果、現代敬語を取り上げているのは2007年版の教科書では3冊、2013年版では4冊に過ぎないことが明らかになった。内容面では、「適切な言葉遣いを主体的に選んだ自己表現」として様々な待遇表現を取り上げ、明白な「敬語の指針」の影響が見られたのは1社の教科書だけであったことから、国語施策は高等学校国語科における敬語教育に反映していないことが明らかになった。さらに、敬語教育を妨げるものとして、大学入試や教員の意識の問題にも言及した。

4. では、奈良県中南部の高校生約500名にアンケートを実施し、規範的な敬語の知識の有無と敬語の運用、さらに配慮の意識や待遇表現の選択の傾向について調査分析し、彼らの敬語の運用上の問題点を検証した。調査の結果明らかになったのは、彼らは謙譲語などの敬語の知識は充分とはいえないが、さまざまな相手や状況に配慮して言葉遣いを選択しているということである。また、近畿中部の方言である「ハル」は現代の高校生の中でも健在であった。

5. では、高校生の敬語調査から明らかになった運用上の問題点を改善し、人間関係や場に応じた適切な表現を選びとる力を付けるための指導のありようを探った。「国語総合」教科書から井上ひさしの小説『ナイン』を題材として指導案を提案し、6. で、教材の開発、教員の意識改革、生徒の意識改革の3点を、今後の課題として述べた。